

だけのご幼稚園とラジオのおっちゃん(5)

しょうごもり
庄籠 道子

「謎が解けた」の巻

用務員の田原のおばちゃんと籠先生が話をしている。三人組はこっそり聞いた。おばちゃんの勤務時間には二時四十五分までらしい。ちょうど三時ごろ幼稚園を出るらしい。幼稚園を出て、道路の向こうの駐車場まで歩く。

「私が帰る時、いつつもラジオのおっちゃんに会うんよ」
と、田原のおばちゃんと言う。
「会うのはええんやけど、きのうね、駐車場から車を出そうとしたら、おっちゃんが『オーライ、オー

「ライ』っていうふうには、道で手招きしてくれるの。私、信じてバックしてええんやろかって迷ってた」

田原のおばちゃんの話聞いて、籠先生の目がきらりと光り、

「いつも帰る時に会うんやね？ 三時ごろに会うんやね」

と念を押した。籠先生のやつ、なにかたくらんでるぞ。三人組は、気になったが、帰る時間になってしまった。

よく朝、

「園長先生、わかりました！ やっぱラジオでした」

と、籠先生が竹田園長先生にきっぱりと言っているのを三人組は聞いた。何の話かわからずびっくりしている竹田園長先生を前に籠先生は得意そうに説明

した。

「私、帰って、新聞のラジオ番組欄を見たんです。それで、わかったんです。」

おっちゃんは、NHK第二放送がラジオ体操をする時間に幼稚園に来るんです。朝八時半・十二時・三時です。その時間に、大きな音でラジオ体操を聞きながら歩いてくる。だから、いつもおっちゃんのラジオからはラジオ体操が流れている。

その他の時間にも、おっちゃんは幼稚園に来るけれど、その時はラジオの音は小さいか消していて聞こえない。

いつもラジオ体操が流れている局なんかないから、カセットデッキではないかと、私は疑っておりましたが、ラジオのおっちゃんを持っているのは、やはりラジオでありました！」

どうだ。まいったか。籠先生は腰に手を当て、胸を張って高らかに宣言した。へえ、なるほど。だけ

ど、そんなおおげさなことかいな。ラジオを持つてなきや、誰もラジオのおっちゃんって言わないってば。竹田園長先生は「ふーん」と言つてにが笑いました。

その日の午後、

「先生、たつやくんが竹馬、乗れたで！」

りようたが大声で呼んだ。

「え？ すごい！ どれどれ」

竹田園長先生も籠先生も田原のおばちゃんも、まわりの子どもたちも、みんなぞろぞろ走つていった。

先月、老人会のおじいちゃんたちが幼稚園に来て、十八人全員に竹馬を作つてくれた。

りようたとかずはそれから毎日練習して、一週間もしないで乗れるようになった。「竹馬名人認定証」というメダルをもらった。

先週、もくもくと練習していたなみかが乗れるようになった。メダルの授賞式があった。

一輪車に乗れるようになったあいこは「一輪車名人認定証」のメダルをもらった。

きょうは、たつやだ。

「乗つてみて」

竹田園長先生の声に、たつやがにこにこしながら竹馬に乗つて歩いた。やった。鉄棒のはしの白線から、鉄棒のあっちの白線まで行けた。

「合格！」

「やったー！」

その日の午後、たつやととしなりがけんかをしていた。

みんなでかくれんぼをしていた。うさぎ小屋のかけにかくれていたたつやが



「まあだだよ」

と言いながら、うさぎ小屋のかけから出て体育倉庫の裏にかくれようとした。

おにのとしなりが

「もういいかい」

と言って顔をあげて

「たつやくん、みーつけた！」

と言った。

「『まあだだよ』て言うたやんか」

とたつやは怒った。

「聞こえんような小さな声で言うのが悪い。たつや

くんが おにやで」

と、としなりは当然だろうというような口調で言った。

たつやは頭に来た。それで言った。

「竹馬にも乗れんくせに、えらそーにすんなよ」

としなりは返事ができなかった。

その週の金曜

日、お迎えの時に

としなりのおじい

ちゃんが先生に言った。

「二日休みやから、竹馬、家に持って帰って帰って練習し

てええんやろか？ どうもとしなり、元気がのうて

なあ」

「はい、どうぞ、持って帰って帰って練習してください」

月曜日、としなりは朝来るなり

「先生、竹馬の試験して」

と、言った。ばっちり乗れるようになっていた。

「おうちでがんばって練習したのね。すごいね」

竹田園長先生にほめてもらったが、としなりはど

うってことないって顔をしていた。



そして、次の月曜日、としなりは、そ知らぬ顔をして一輪車に乗っている。

「あれ、としなりくん、一輪車乗れるようになったん？」

「うん」

「すごい。幼稚園では一度も練習してへんかったねえ。家で練習したん？」

「べつに……」

「一輪車、乗れるようになったの、男の子では一番だね」

としなりは、「一輪車名人認定証」のメダルの受賞式の時もあたりまえという顔をしていた。

「としなりくん、すごいなあ」

りょうたとたつやが言っても、としなりはやつぱり「べつに」

としか言わなかった。でも、たつやは聞いてしまった。籠先生がこっそりとしなりのおじいちゃんに尋

ねていたのを。

「としなりくん、竹馬も一輪車もあつという間に乗れるようになってすごいですねえ。やつぱり家で練習はつたんですか？」

「そりゃあ、もう。どんなもんやったか。必死でしたわ。よっぽどくやしかったんでしょな」

三日後だっただろうか。自転車の順番で三人組がもめた。りょうたが先に大きい自転車のところに行つたのにとしなりは自分が先だと言い張つた。た

つやが

「りょうちゃんが先やったで」

と言うと、としなりは言つた。

「なんやねん、一輪車にも乗れんくせして！」

たつやは黙るしかなかった。

(保育研究グループ はるにれ)